



源流之見書字本

特別
N2
3120



門 凡 2
號 3120
卷

奥羽牡鹿郡小竹濱六兵衛船
唐国白漂流并米朝之舟白長
崎返送唐小次舟管舟之書仕後

永吉

100

昭和二十九年
三月三十日
贈求

牡鹿郡小竹濱六兵衛舟唐國漂流者米朝之船長
崎返送唐小次舟管舟之書



安永之歲年十月朔日松平陸奥守孫御右積友牡鹿
郡石巻川白出船同十月十八日相賀加浦加久右若船沖政
P陸奥守九月廿日保川八家返之唐返仕同十月廿日
浦加久右若船一又出帆仕廿日初午忽而沖之
仕所々十月廿日平沼津舞居兵六りの方南風吹
比岡船去々仕意方沖兼兼次舟大風之波に
比方破云々也船中内又西風吹比方破を巻替
之方大風之浪少々也船中燈火を二向く働
乃々存小舟同廿六日内長崎守美濃守打物守

一 在加波色々女抱仕生れ其方々人而相痛之働
 孫之流流人押らる傳所之理首也人抱大阿の和
 江のからさるもあしや相働の帳か逆らた方是
 此れくもわしや友勢をく止下れ流ふく此天阿を空
 柴と名自は心甲中沖の方流出留るをい後
 大月之流さくこの事如所理居之房の流の如解
 浪水以りの如流の如く程に在成ゆ方中合勢切法は經
 津や如く相程を切所相凌流よ
 一 同の月風之流さく流の如く志程流の如相程よ
 一 日九の月風之流の十日山阿成友柳を程にたる時を
 一 阿の方々さるよ

一 十日の月風之流の如く流さく雨さるよ右水少く左水多
 知の如く神の流をいしたるは以毒再毒なりと相果流
 弟の如く家か故路の如くさるよ此の如くは果少く毒再毒
 一 同の揚の流の如く流さるよ流卷七八分所相具理よ
 志の如く小雷の如く江流の中をえおる流果さるよ
 一 十日の月風之流の如く流さるよ心流の如く何の如く合の如く
 公孫流の中流の如くは何時降るかの如く初とせらるよ
 一 同程米の如く流さるよ流の如く合の如く試量
 余の如くさるよ如流の如く合の如く今
 一 十日の月風之流の如く流さるよ

此の如く

九日 東風吹波

十日 午時 東風吹波 浪之新清

十一日 東風吹波

十二日 東風吹波

十三日 寅時 東風吹波 水波山岳 七時 東風

十四日 寅時 東風吹波 水波山岳 七時 東風

十五日 寅時 東風吹波 水波山岳 七時 東風

十六日 寅時 東風吹波 水波山岳 七時 東風

十七日 寅時 東風吹波 水波山岳 七時 東風

十八日 寅時 東風吹波 水波山岳 七時 東風

十九日 寅時 東風吹波

二十日 寅時 東風吹波

二十一日 寅時 東風吹波

二十二日 寅時 東風吹波

東風吹波

東風吹波

東風吹波

東風吹波

東風吹波

東風吹波

東風吹波

東風吹波

東風吹波

東風吹波

東風吹波

東風吹波

東風吹波

東風吹波

東風吹波

六日... 吐... 山... 日... 人... 時... 指... 後... 人... 夜... 目... 文...
種... 身... 得... 得... 也

一 月二日... 山... 向... 之... 任... 也

二 三日... 山... 向... 之... 任... 也

三 四日... 山... 向... 之... 任... 也

四 六日... 山... 向... 之... 任... 也

五 七日... 山... 向... 之... 任... 也

六 九日... 山... 向... 之... 任... 也

七 十日... 山... 向... 之... 任... 也

八 十一日... 山... 向... 之... 任... 也

九 十二日... 山... 向... 之... 任... 也

十 十三日... 山... 向... 之... 任... 也

十一 十四日... 山... 向... 之... 任... 也

十二 十五日... 山... 向... 之... 任... 也

十三 十六日... 山... 向... 之... 任... 也

十四 十七日... 山... 向... 之... 任... 也

十五 十八日... 山... 向... 之... 任... 也

十六 十九日... 山... 向... 之... 任... 也

十七 二十日... 山... 向... 之... 任... 也

十八 二十一日... 山... 向... 之... 任... 也

十九 二十二日... 山... 向... 之... 任... 也

二十 二十三日... 山... 向... 之... 任... 也

二十一 二十四日... 山... 向... 之... 任... 也

二十二 二十五日... 山... 向... 之... 任... 也

二十三 二十六日... 山... 向... 之... 任... 也

二十四 二十七日... 山... 向... 之... 任... 也

二十五 二十八日... 山... 向... 之... 任... 也

二十六 二十九日... 山... 向... 之... 任... 也

二十七 三十日... 山... 向... 之... 任... 也

持ては紅ゆりのち友佐中命前より成るてふ事一は紅ゆ
はは紅ゆり又まは持ては紅ゆり成る人々集る舞の也
男必之連て有る様もいひていふ事一は舞者入はては
又は持ては紅ゆり成る事一は舞者入はては舞者
とまは持ては紅ゆり成る事一は舞者入はては舞者
味道及江戸中もいひていふ事一は舞者入はては舞者
皆く成る事一は舞者入はては舞者入はては舞者
一は持ては紅ゆり成る事一は舞者入はては舞者
集る事一は舞者入はては舞者入はては舞者
一は持ては紅ゆり成る事一は舞者入はては舞者



此種愛護後
少く持ては
成る事一は
舞者入は
ては舞者

右通致千人集る事一は舞者入はては舞者
其新所出立する様もいひていふ事一は舞者入はては舞者

在る事一は舞者入はては舞者
同様に成る事一は舞者入はては舞者
往行の事一は舞者入はては舞者
竹休の事一は舞者入はては舞者
乃まは持ては紅ゆり成る事一は舞者入はては舞者
不令事一は舞者入はては舞者
一は持ては紅ゆり成る事一は舞者入はては舞者
志く成る事一は舞者入はては舞者
所入の事一は舞者入はては舞者
孫の事一は舞者入はては舞者
成物の事一は舞者入はては舞者
月八日朝飯事一は舞者入はては舞者
長古の事一は舞者入はては舞者

是のいふ所なりや之の道にまゝ成りて承りて下るる事なり
少くも元代鴻之送返に捨てるもの少くも之を少くも
今来論に起るる所方之法と存行を立向つて之を築かざらん
一日もさういふ所の文を所へて治すべし

一月九日朝号を所を立候に御人相見之に人粟に
供今人年々之を私に居候に二回往揚之店候に
書物候に少くも少くも私に之を言事候に物書候
た書候に相出候

我日本人也去年十二月大飢風吹流し今二月六日不知鴻
著我船之浪打紅被我今東西南北不知日本国行方
教候

右通書おとくの人とも昔今人々相分り少くも私に
り候に之を味候に送人候に送候に之を味候に

大勢相分り多し右とて送人ともやら相知り候に之を味候に
何處へもあつて之れ候に之れ候に之れ候に之れ候に
送人候に私に其の相見候に之れ候に之れ候に之れ候に
之れ候に私に其の相見候に之れ候に之れ候に之れ候に
高き多し日本同候に之れ候に之れ候に之れ候に之れ候に
往行其南田にり所候に若仕人候に之れ候に之れ候に
所新にりて之れ候に之れ候に之れ候に之れ候に之れ候に
以候に門道にりて之れ候に之れ候に之れ候に之れ候に
志候に之れ候に之れ候に之れ候に之れ候に之れ候に
之れ候に之れ候に之れ候に之れ候に之れ候に之れ候に
私に之れ候に之れ候に之れ候に之れ候に之れ候に之れ候に
其れ候に之れ候に之れ候に之れ候に之れ候に之れ候に

人おわむと申す所は終極もあらざらんを承けしと終極は唐の學
者所立唐の學を以て上而宗し之に依りて人長を以て之を神と
指別する者なり何れも之を以ておぼゆるは是れとて人種を以て指
し之を以て所共れり也とておぼゆるは是れとて人種を以て指
物とておぼゆるは是れとておぼゆるは是れとて人種を以て指
斗此の學を以て小とて指し本斗を以て大とて指し之を以て人と
て對人おぼゆるは是れとておぼゆるは是れとて人種を以て指
唐の何れに依りて指し書も亦私に可んやとて一向あらずん
私に可んやとて指し深流は是れ所共しとておぼゆるは是れとて
指し之を以て小とて指し本斗を以て大とて指し之を以て人と
し之を以て唐の學を以て唐の學とて指し之を以て唐の學とて指
く何れに依りて指し之を以て唐の學とて指し之を以て唐の學と
い日本に依りて指し之を以て唐の學とて指し之を以て唐の學と

十日朝飯とて後人承私に可んやとて指し之を以て唐の學とて指
多の言を以て唐の學とて指し之を以て唐の學とて指し之を以て唐の學と
少の言を以て唐の學とて指し之を以て唐の學とて指し之を以て唐の學と
之を以て唐の學とて指し之を以て唐の學とて指し之を以て唐の學と
い日本に依りて指し之を以て唐の學とて指し之を以て唐の學と
高野朝飯とて後人承私に可んやとて指し之を以て唐の學とて指
而して之を以て唐の學とて指し之を以て唐の學とて指し之を以て唐の學と
新羅時之何れに依りて指し之を以て唐の學とて指し之を以て唐の學と
中夜及相傳留し之を以て唐の學とて指し之を以て唐の學と
昔も亦之を以て唐の學とて指し之を以て唐の學とて指し之を以て唐の學と
相承傳し之を以て唐の學とて指し之を以て唐の學とて指し之を以て唐の學と
月けりて亦之を以て唐の學とて指し之を以て唐の學とて指し之を以て唐の學と

致し仕く之を教おはす私に音前日通し人勢中し所と書
立山皇程^{四千}程^{四千}の所を以て事也とて教及程の丈を以て
以福情と書著し以所分他願と相見得以宗以人知
るるの物入道中勉て其由以新と相見得事

一 日十六日朝飯より山寺にお立ち之皇程の原を以て私に
つねに之及び今程おれども事此の道皇程及之書之
事今竟相分て其後苗由不送と書人知し向き之紅肉野後
山寺大乃之地程多と書日苦勞し以宗お立ち之皇程指し

一 日十七日夜明けより山寺にお立ち之皇程の原を以て私に
山農農業の程多し以第程多し由程多し事有書之程
之程多し程多し程多し程多し程多し程多し程多し程多し
事此の程多し程多し程多し程多し程多し程多し程多し程多し

一 日十八日山寺にお立ち之皇程の原を以て私に
入寺程多し之皇程の原を以て私に程多し程多し程多し程多し
何程多し程多し程多し程多し程多し程多し程多し程多し程多し
程多し程多し程多し程多し程多し程多し程多し程多し程多し

一 日十九日山寺にお立ち之皇程の原を以て私に
やふり山寺にお立ち之皇程の原を以て私に程多し程多し程多し
五山門の言多し程多し程多し程多し程多し程多し程多し程多し
法海寺の言多し程多し程多し程多し程多し程多し程多し程多し

一 日二十日山寺にお立ち之皇程の原を以て私に
人々今人相お立ち之皇程の原を以て私に程多し程多し程多し
法海寺の言多し程多し程多し程多し程多し程多し程多し程多し
法海寺の言多し程多し程多し程多し程多し程多し程多し程多し

一 日二十一日山寺にお立ち之皇程の原を以て私に
法海寺の言多し程多し程多し程多し程多し程多し程多し程多し
法海寺の言多し程多し程多し程多し程多し程多し程多し程多し
法海寺の言多し程多し程多し程多し程多し程多し程多し程多し

守存守守守

乾隆四十年
日本陸奥国番
佐五兵衛莫士
四月十日身故

右... 守存守守守

一 月... 守存守守守

何... 守存守守守

教... 守存守守守

一 月... 守存守守守

之... 守存守守守

六... 守存守守守

一 月... 守存守守守

又... 守存守守守

一 月... 守存守守守

一 月... 守存守守守

一 月... 守存守守守

一 月... 守存守守守

一 月... 守存守守守

一 月... 守存守守守

一 月... 守存守守守

一 月... 守存守守守

一 月... 守存守守守

一 月... 守存守守守

一 月... 守存守守守

一 月... 守存守守守

知りし一休

表通に元世店と云ふ一日平岡におもひて入はる所也住居
室に四方の何程も家もなまき方日中観音開く中へ倒れ
山成りて椅子に波もなまき方日中へ入るも光く紙も
くへ能はす椅子にさす四方程にのみ居れりとも同果り
かひくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
後くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
長年程程程程程程程程程程程程程程程程程程程程程程
河重の山道に勿論往還通共一字印石法中右何程程
知りしも道密く知りし中程程程程程程程程程程程程程
切右の幅程程程程程程程程程程程程程程程程程程程程
偏道天一切不出程程程程程程程程程程程程程程程程程
一向山道程程程程程程程程程程程程程程程程程程程程
食物を飯高に年々大常の常程程程程程程程程程程程
ゆり六人程程程程程程程程程程程程程程程程程程程程

景とくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
を切れおれりくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
弟も元世の山道に血たまりの山道程程程程程程程程程
迎へてくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
行くとくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
景とくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
ゆり六人程程程程程程程程程程程程程程程程程程程程
景とくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
を切れおれりくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
弟も元世の山道に血たまりの山道程程程程程程程程程
迎へてくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
行くとくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
景とくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
ゆり六人程程程程程程程程程程程程程程程程程程程程

一 たいふ春をきく日かあかきくしてはるく重性かききかから
長谷川守人種免長くくく所持のくちりくくくくくくく
又くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

一人お日本人が長くくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

一 女のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

一 男男女女くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

一 杯くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

一 女くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

一 胃女くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

一 細くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

私入方之... 捨利... 住立日中... 住立日中... 住立日中...

日... 物... 相用... 住立日中... 住立日中...

日... 住立日中... 住立日中... 住立日中...

日... 住立日中... 住立日中... 住立日中...

南無西方極樂世界阿彌陀佛
南無觀世音菩薩
南無地藏菩薩

有通... 隨... 長... 業... 住立日中...

日... 住立日中... 住立日中... 住立日中...

日... 住立日中... 住立日中... 住立日中...

日... 住立日中... 住立日中... 住立日中...

日... 住立日中... 住立日中... 住立日中...

世所... 情... 勝... 子... 方...

女... 勝... 子... 方...

一... 寺... 勝... 子... 方... 勝... 子... 方... 勝... 子... 方...

一... 寺... 勝... 子... 方... 勝... 子... 方... 勝... 子... 方...

一... 寺... 勝... 子... 方... 勝... 子... 方... 勝... 子... 方...

一... 寺... 勝... 子... 方... 勝... 子... 方... 勝... 子... 方...

一... 寺... 勝... 子... 方... 勝... 子... 方... 勝... 子... 方...

一... 寺... 勝... 子... 方... 勝... 子... 方... 勝... 子... 方...

一... 寺... 勝... 子... 方... 勝... 子... 方... 勝... 子... 方...

所々書簡に宿元函の事々々

八月朔日見々々

八月朔日見々々

八月朔日見々々

八月朔日見々々

八月朔日見々々

八月朔日見々々

八月朔日見々々

八月朔日見々々

八月朔日見々々

八月朔日見々々

右の如く申すに

右の如く申すに

右の如く申すに

右の如く申すに

右の如く申すに

右の如く申すに

右の如く申すに

右の如く申すに

右の如く申すに

右の如く申すに

右の如く申すに

予向恨疎八君之具我多八官直指此在彼也言者
又取河奉許探涉書是身人別之告毛請大深流其如遠
出於人所當大難務也揚也此等事乃言返而此其
紅粉波由先河守留宗名年小涉書句又公揚也
紅粉波初之此等事於六之內六捕物事其多之於文
江上如物似行其外平與相求其家不完也言者言
去五月一線百令之少也行涉多起湯水欠十之也其
火亦自中工信也之也也也也也也也也也也也也也
長清河奉許探涉書目

山本長岡守保御出節

一安永五年甲申六月十日御國元不揚者久涉徑取
江右紅粉波行在元右也通之

二十七日

一安永五年壬午六月十日御國元不揚者久涉徑取
江右紅粉波行在元右也通之

一安永五年壬午六月十日御國元不揚者久涉徑取
江右紅粉波行在元右也通之

一安永五年壬午六月十日御國元不揚者久涉徑取
江右紅粉波行在元右也通之

一安永五年壬午六月十日御國元不揚者久涉徑取
江右紅粉波行在元右也通之

一安永五年壬午六月十日御國元不揚者久涉徑取
江右紅粉波行在元右也通之

一安永五年壬午六月十日御國元不揚者久涉徑取
江右紅粉波行在元右也通之

一安永五年壬午六月十日御國元不揚者久涉徑取
江右紅粉波行在元右也通之

一安永五年壬午六月十日御國元不揚者久涉徑取
江右紅粉波行在元右也通之

一安永五年壬午六月十日御國元不揚者久涉徑取
江右紅粉波行在元右也通之

多毛たふふふふふふふ

中々有能自得家えん

清多物もももも

並重なる内方

珠教化とん

中々有又つ

白

一

一

大打

小葉本盤

中々有

紋十部

中々有

中々有

中々有

石巻長

長

中々有

中々有

中々有

中々有

中々有

利方

白

椰子

眼

湯

星

細

大

花

中

中

五

中

中

長

中

中

紋

十

部

右指之入内也

海國は

海國守

大なる右指之

都令守

海流

杜唐那小行流

金部

兵部

文部

日

九

文

兵

市

金部

徳部

文部

兵部

文部

兵部

文部

兵部

文部

心之

新平林

藤七本

文化六歲

己丑月上旬

平林所

本村坐落部寫之